

おんくさるゝ……

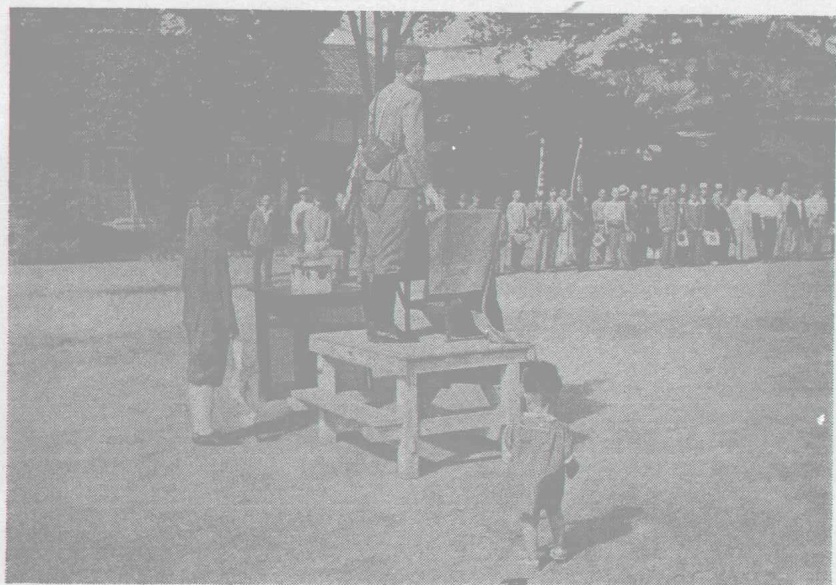
滋賀県城崎町三丁目

文藝春秋

滋賀県遺族会青年部編

おとうさん…

私たちは生きてきた



出征するおとうさん（手前の幼児は川村節子さん一当時3歳）

おとうさん…

私たちは生きてきた

昭和四十二年八月一日 第一刷
昭和四十二年八月五日 第二刷

定価 四二〇円

著者 滋賀県遺族会青年部

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3
電話東京(283)一二二(代表)
振替東京 七八七四三番

万一乱丁・落丁がありましたらお取替えいたします

はじめに

人々の会話の中には「お父さん」という言葉があります。子供達は、この「お父さん」を誰よりも偉いと思うし、信頼し切って成長します。又、お母さんにとっても、子供同様「お父さん」は、最も信頼すべき人でしょう。

この「お父さん」を知らずして、成長する子供達が世の中に何人かいます。その一人に戦争遺児がいます。私達は、先の第二次世界大戦に父親を失った戦争遺児ですが、多くは、自分のお父さんの顔を知りません。いわんや、父親の味など、殆ど知らずに成長して来ました。そして今、もう父親と同じ年かっこうになり、「お父さん」とさえ呼ばれるようになりました。

私達は、戦争そのものは、経験していませんし、戦争中の記憶もありません。しかし幼いながらに戦争につながる何かを体験して来ました。又そうした生活の中で、いくつかのものも学びました。父のいない家庭、とりわけ母の苦勞。出征の時の見送りと、戦後に残された生活のすべて。

私達は、いつの間にか、無意識の内に、心の中で二十数年「おとうさん……」と叫びつづけ

て来たようです。それが戦争遺児の成長の記録です。

戦後二十年をすぎた今、私達は、この戦争遺児の記録を是非文字にして遺したいと考えました。今更自分の過去を思いだしたくないという気持、自分達だけが犠牲者ではないという気持、自分ながらにようやくかんだ今の幸せを思うと、色々と心に抵抗を感じましたが、やはり何としても記録としてとどめたいと思いました。

人間の歴史は、戦争のくり返しだったとさえいわれます。そして今尚世界のどこかで、いつも戦争はくり返されています。戦争には、常に何人かの戦争遺族がつけられ、そしてその中に幼い戦争遺児が生まれるのです。その人達は、又私達と同じ道を通して成長するのだと思うと、もう私達の血潮は、くやしきで高鳴るのです。戦争を経験された人も、これから生まれる新しい世代の人々も、かつて日本の体験した戦争の断面を、私達の生活体験から知っていただければ誠に幸いです。

ところで、いざ書いてみて、一番いやな思い出だけは、正直いって書けませんでした。書きたくないし、又書けないのです。それだけを冒頭にお詫びいたします。

尚この体験記発刊に際しては、東京大学助教授の山下肇先生や出版社の文藝春秋の方々を始め、実に多くの方々の御支援、御協力を受けました。ここに謹しんでお礼申し上げます。

昭和四十二年七月

滋賀県遺族会青年部

目次

父との対話……………	国松善次	11
亡くなった父へ……………	小川喜代子	27
父によく似た夫……………	小島孝子	32
祖父と祖母……………	沢村俊子	36
石臼の重み……………	吉村曄太郎	42
ユーモラスな手紙……………	川村節子	47
嫁いだ母……………	古道静子	51
鯉のぼりを買ってくれた父……………	北川桃雄	54

遊べなかった小坊主時代……………	伊藤了円	58
小学校三年生のアルバイト……………	和田涼子	62
母の苦勞……………	麻原康子	66
名もなき一輪の花……………	宇田泰一	69
深夜の酔客……………	富居慶子	72
“後家の息子”といわれて……………	深尾修	76
行けなかった高校……………	岸山平	80
白衣の人……………	北岸艶子	84
父恋星……………	津田た江	88
出火……………	森野久嗣	90
高校を4Hクラブにかえて……………	福永政子	96
父の最後の手紙……………	村田昌子	100
父の面影……………	小川美智子	103

おとうさん、ありがとう……………	武村美津子	106
耕耘機と私……………	清水登子	109
断片日記……………	中西比佐子	113
欲しかったランドセル……………	田口照子	124
女中がわりの一年間……………	岡田武司	128
母にかけた心配……………	三橋和夫	132
父にたいする役目……………	井関賢一	136
私の歩んで来た道……………	川崎かずえ	142
授業参観日……………	村田有利子	148
再婚した母……………	松本康代	152
父の助言……………	野田せつ子	154
心の中に生きる父……………	平居照雄	157
母の死……………	高本文善	160

お母さん、ありがとう……………	松井尚之	164
弟の手紙……………	大橋喜太郎	168
お父さん、私のネックレスよ……………	三浦保子	171
雑草のように生きた母……………	沢規久美	175
安心させたい母……………	布施昭子	179
職場で歌った軍歌……………	西村静子	182
母の味……………	山辺文子	184
郵政大臣に表彰されて……………	隼瀬丈太郎	187
母となつて……………	中島久栄	193
母のこと……………	駒井義弘	195
父が自慢した子……………	辻甚市郎	199
生きていてごめんなさい……………	垣立外男	203
父の匂い……………	森育子	207

戦後二十年をかえりみて……………	中村正春	211
投げつけた三万円……………	井狩重次	214
この土、この石……………	山田利治	221
お父さん、江州米です……………	宇野玲子	225
父の残したもの……………	那須昭子	228
父の声……………	馬場康子	231
父に恥じるなといった母……………	平井康博	236

おとうさん…

——
私たちは生きてきた

各篇末にある「父のこと」の凡例

①父の名前②戦死時の年齢③出征時の職業④
出征の年月⑤戦死の年月⑥戦死した場所⑦当
時の階級⑧当時の留守家族の構成と年齢

父との対話

栗東町 国松善次

二九歳
公務員

母のいない家

小学校も高学年の頃のことである。私は学校から帰ると、毎日自動車の模型作りに夢中になっていた。

石炭箱、タル木、板、車輪のお古など、そのへんの材料を見さかいてもなく使い、また家にあるありとあらゆる道具を持ちだして、とにかく乗れる自動車を作ろうとしていた。これには、何人かの友達と弟がくわわった。

ある日、友達の一人が帰りがけにこんな捨てぜりふを残していった。

「君はお父さんがいないからいいなあ」

このとき、私はその言葉を頭の中で何度もくり返していた。よく意味がわからなかったので

ある。

僕には父がいない、だから幸せだという。言葉そのものの意味はわかる。だが、そのとき友達は、ほんとうにうらめしそうに私の顔を見ていった。しかし、私には、相手の表情の意味するものがどうしても理解できなかったのである。

私は、それまでにほんとうにタマの出るビストルをつくったり、これを試すため、仲間と少年探検団をつくって近くの山に出かけたりしたこともあった。またあるときは、父の本箱をそっくり持ちだして、私設子供文庫を開いたりもした。そして、そういったぐいの子供の夢は、いつもわが家で実現されていた。

私の家は、母と妹、弟の四人で、母は私たちきょうだいにカマっている時間的余裕をもたなかった。だから、私はいつも好きなことを、好きなようにやっていたのである。友達は、このことをほんとうにうらやましく思ったにちがいない。以来、私の頭からこの言葉は消えていない。

この日から、私は自分の家には父がいないのだということであらためて感じた。そして、それが普通でないということも理解するようになった。

父は私が小学校一年のとき（昭和十九年）の七月十八日に、中部太平洋方面で戦死した。当時妹は五歳、弟は二歳だった。

父の村葬は、一年生の終わりの頃行なわれた。私は父の遺骨を白い布で首から吊って、長い

行列にくわわった。祭壇の前に弟と出たとき、弟はキョロキョロとものめずらしそうに会場を見わたしていた。そのうち、人々の焼香する姿を不思議そうに見ていたが、やがて弟も私のさし通りに焼香を終えた。このときの気持は、悲しいというより、参列者の焦点になっているという緊張感だけだった。

このあと、祖父と祖母は、二人の息子のあいつぐ戦死と、思いもよらなかった敗戦を経験してつぎつぎと他界した。

以来、母と私たち子供三人の生活がはじまった。母は、家業の農業に専心した。

学校から帰っても、母はいつも留守だった。そして、母のいない家は、いやに暗く、冷たいものだった。まるで、大きな土蔵のように思えた。仕方なく、カバンを置くと、そのへんのものを持ちだして遊びに夢中になった。

夕方になると、きょうだい三人はバケツで水を運んで風呂をわかした。一回わかすのにバケツ三十杯は運ばねばならず、弟の書く「正」の字がうらめしかった。少し大きくなってからは、ごはんとおかずも作って母の帰宅を待ったが、そのうち眠ってしまうことが多かった。

仏壇の中の父の手紙

中学を終え、いよいよ自分の将来を考えるとよくなって、私は迷った。友人たちにまじって、進学勉強はしていたものの、母の苦勞を思うと、やはり働いて得る月給がほしかった。しかし、

いっぽう母がなんとかみなと同じように、高校進学をしてほしいと頑張っている気持ちも嬉しかった。だが、進学するとしても、どのコースを選ぶべきなのか、いずれ技術を身につけるコースを選ぶにしても、家の将来と自分の将来をどう結びつけるか、私の頭の中はこんがらかってしまった。

とうとう入学願書の締切の日まで決めかねて、とにかく普通高校に進むことにした。妹は母の立場を考えて、農繁期の休める学校へ進んだ。

高校を終える頃、三年前と同じことで、また悩んだ。机をならべている友達が、大学進学をめざしているとき、私もやはり大学に進みたいと思った。しかし、自分が進学することは、母の背に三人の授業料の負担がいっぺんにのしかかることである。それでなくても休みのたびに土方のアルバイトに出、奨学資金に頼っている現状を考えると、急には結論がだせなかった。それにまた、よしんば進学が許されるとしても、いったい自分は将来なにになろうとするのか。自分にもっともふさわしい道はなになのか、さっぱりわからなかった。

そんなとき、つくづく父の意見がほしかった。正直いって、母には相談したくなかった。母には母の立場があり、その立場も考えねばならないと思ったからである。

そんなある日、母は仏壇の引出しから、一通の古びた手紙をだしてきた。それは、父が出征する朝書いたものである。

上書きに「戦死の公報あらば開けよ」と書かれていた。そこには、こんなことが書いてあっ